（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　小谷（こたに）　瑛輔（えいすけ）

芥川龍之介の作品は、従来ともすれば、その理知的で技巧的な作風が、過度に人工的な印象を与えるものとして否定的に評価される傾向があった。本論はこれに対して、むしろ技巧を自ら強調し、露出してみせることによって、より内在的な虚構論を展開しようとした芥川の意図をあらためて再評価したものである。

構成は全九章からなる。序章ではまず上記の問題提起がなされ、一章では『羅生門』『鼻』を対象に、登場人物の心理を統括し、あるいは主題を明示しようとする語りの明晰性が、かえってその不可能をあらわにしていく様態が分析されている。二章の『手巾』論では、芥川の作為を批判する同時代のまなざしを作中に取り込み、これを批判的に乗り越えていこうとする意図が、同時代のコンテクストの詳細な検討を通して明らかにされている。『芋粥』と『或日の大石内蔵之助』を扱った三章においては、「人間」が描けているか否か、という当時強固に存在したヒューマニスティックな批評軸を批判的に相対化していこうとする意図が明らかにされている。四章では『南瓜』を中心に、虚構性を過剰に装うことによって「現実」と「虚構」という二元論的な発想そのものが無化されていく様態が明らかにされ、さらに五章の『開化の殺人』論においては、完成原稿の詳細な検討を通して、当該小説の「探偵小説」としての不自然さが指摘され、さらにその背後に、「告白」しようとしてもそれをなしえぬさまをことさらに示していく、演劇的な性格が見通されている。『龍』と『蜜柑』を論じた六章においては、虚構が成立した瞬間に作り手がそこから疎外されてしまう逆説に注意が向けられている。そこから生じる孤独をいたずらに絶対化することなく、いかに乗り越えていくかに芥川の課題があった、という指摘は傾聴に値するものである。『疑惑』を取り上げた七章は、小説とその背景をなす「哲学館事件」「教育勅語撤回風説事件」「南北朝正閏論」などとの関わりが詳細に検討された上で、芥川が従来考えられていたよりはるかに同時代の政治動向に関心を持ち、近代日本の抑圧された「狂気」に自覚的であった事実が明らかにされている。終章では芥川が中期以降、「聖なる愚人」を好んで作品化していた点に注目し、こうした人間像への憧憬と懐疑を共に抱く作者の姿が抽出されている。その背後には、あえて表層的な主題を掲げた上で、そこに安住できぬことを示していく、芥川独自の方法意識が介在しているのであるという。

総じて小説の解釈において、主題の「ゆれ」を過度に強調する操作が目立つものの、従来、「理知」「技巧」といった概念で整理されがちであった芥川像に異を唱え、虚構論としてこれを一個の運動概念に組み替えていこうとする発想は、今後の研究に新たな地平を切り開くものとして評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。